

15

産育習俗に関する基礎的一考察 ——積善坊流修法資料にみる呪符について——

坂本 陽子

順天堂大学大学院医学研究科博士課程

今日、仏教と医術は別個のものとして語られるが、仏教伝来以降、両者は密接な関わりを持ってきた。仏教において僧侶が学ぶべき学問・技術は五明といわれるが、そのひとつが医方明、つまり医学とされる。また、在来の信仰とはちがう呪術的技法を備えた仏教は、我が国において主に病氣平癒という効能をもって受け入れられていった側面を持つ。それは、看病禪師といった呪医としての僧侶たちの活躍からもみてとれる。医療と呪術、加持祈祷といった呪的世界が、同一あるいは互いに密接な関係をもって併存していたことは速水侑氏ら多くの先学の指摘するところである。

今日のように医療が発達する以前の時代においては、出産は今以上に流産や産婦の死などの危険が伴うものであり、生死が表裏に存在するため宗教的観念と直結する。また、無事に出産した後も流行り病などで死亡するケースも多く、それだけに安産・子育てへの祈りはより切実なものであったと思われる。では、妊娠・出産をはじめとして、母子にまつわる呪術や加持祈祷にはどのようなものがあるのだろうか。

仏教宗派において、日蓮宗は加持祈祷を盛んに行うことで知られる。これらの加持祈祷の手順や仕様は口伝・相承のものとして秘伝とされており、宗派の中でも限られた人間のみが目にすることができ、通常公にされることはない。しかし近年に入り、そうした無漏相承の古文書群の一部が翻刻・出版されるようになり、一般の目に触れる機会を得られることになった。今回取り上げる史料はそうした秘伝書のひとつであり、身延文庫蔵の積善坊流の修法資料で、日蓮宗の祈祷秘伝書である。

日蓮宗の祈祷の流派には大きく中山流と身延山流とがあり、積善坊流は身延山流の中心とされる。日蓮宗では、加持祈祷を行うことができる僧侶を修法師という。修法師は、厳寒期に行われる荒行を無事に終えることができた者に認められる呼称であり、荒行堂に100日間籠もり、わずかな睡眠と極々薄い白粥を中心とした食事のなか、1日7回の水行や読経、木剣加持などの修行を徹底的におさめた者にだけ認められる。その修行のなかにおいて、祈祷秘伝書の相伝が許されるのである。

加持祈祷は人々のさまざまな願いに応じて行われる。それらの手順や作法を記した秘伝書において、妊娠・出産・育児に関する記述がないか確認したところ、さまざまな呪符の存在が明らかとなった。『祈祷妙苜抄』には、難産のときに使用する「難産御符」、胎内で児が死亡した場合の「胎内ニテ子ノ死シタリシ時生ル御符」、夜泣きのための「幼児夜鳴苜」「夜鳴究竟守」、「乳呑付苜」「乳ヲハナス苜」といった母乳育児に関する苜など9点が記されている。『引取相承之事』では、難産や母乳に関する呪符、児の夜泣きや嘔吐に対応する呪符などをはじめとして、「難産ヲ知ル事」「胎内ノ子男女ヲ知ル法」といった秘伝もみられる。そのほかの秘伝書にも難産をはじめとした各種の呪符が記されている。それぞれの史料や呪符の詳細な検討は今後進めていく予定であるが、これらは妊娠・出産をめぐる呪的世界が存在していたことを示すものである。

現在、積善坊流は相伝者を唯一人として厳しく重きを置いていたことから明治維新後に途絶えてしまった。しかしながら、これまで秘伝とされ門外不出であった祈祷書の公開は非常に貴重であることはいうまでもなく、これらの史料を検討することは日本の産育習俗の多様性を明らかにするとともに、より立体的な枠組みとして妊娠・出産の歴史を捉えることができるものと思われる。また、医療に代わる、あるいはそれと並んで、祈りが身体的・精神的安寧をもたらすものとして信じてきた人々の思想や世相の一端を捉え、文化史上の基礎的考察の一助となると期待できよう。